
悩めるキサラギ家の人々

東堂 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悩めるキサラギ家の人々

【Nコード】

N0473Z

【作者名】

東堂 司

【あらすじ】

月面都市の有力者、キサラギ家。遠く離れた火星政府でフリッツと名乗る末弟のリョウが、急遽帰ってくる事になった。迎える兄妹たちは、火星で命からがら脱出する弟の苦労も知らず、それぞれに勝手な日常を送り、勝手な思いを抱いていた・・・。

カイルの場合（前書き）

リトル・ダミーの番外のようなお話です。フリッツの実家が舞台で、気がついたらけっこう個性的な兄弟が揃ってしまったので載せてみました。連載形式にしてありますが、長編ではなく読みきりです。

カイルの場合

ぐると囲んだ縁取りには、金細工による手の込んだ女神が映える、大きな鏡の前に立って、カイルがネクタイを締めていた。

色は濃紺。光沢のある縦ラインが入った生地で仕立てたスーツは、本日下ろしたての新品パリパリである。

生まれながらの秀才。生まれながらのエリート。生まれながらの権力者……月面都市では絶大な権力を誇るキサラギ家の長男、カイル・キサラギ。御年三十五歳。きっちり分けられた七三の髪に、深い緑色の瞳は細めがちで、全体的にスマートな印象を与える容姿をしている。

どこか焦るような手つきで結びなおす横には、渋い木目調の窓枠にはめ込まれた、くもり一つない透明なガラスがある。

そのガラス窓の奥には、燃えるような真っ赤な木々が見えていた。一年中紅葉しっ放しのこの木々たちは、月面都市でも非常に珍しい種類で、キサラギ家のシンボルのような役割を担っている。

「お兄様」

ネクタイの結び目の太さがどうも気に入らないと、せっかく結んだのを解いて結びなおしているところへ、妹のエミリが声をかけてきた。

「リヨウが帰ってくるんですって？」

「ああ」

弟の名が出た途端、カイルの表情が一気に不機嫌な色を浮かべた。元々、生真面目なカイルとは違い、末弟のリヨウはすべからく自由奔放。家督を継ぐ重圧もない彼は、学校でも私生活でも、実に伸び伸びと充実した日々を過ごしてきた。

一方のカイルと言えば、名門キサラギ家の長男。幼少時代は家督を継ぐための英才教育を徹底して施され、成人してからは御家を発展させるために奔走する日々。粉骨碎身、まさに骨身を惜しまず。

人生をキサラギ家のために捧げてきたという、長男の鑑のような人物だ。

自由などという言葉とは程遠い人生を歩んできた彼にとって、末弟のリヨウは……つまり、子供の頃から折り合いがあまりよろしくない間柄なのである。

しかしカイルもカイルである。

生真面目なだけならまだしも、神経質な上に自尊心が強く、何かという他者を見下すような態度を取る性質がある。長男で頭の出来がいいから後継者としてやっていけているのであって、これがない、家督争いになくなっていたら、今の地位にいられたかどうか、甚だ怪しいと言わざるをえないのだ。

「ふん、あいつが帰ったところで、父さんの説教が待っているだけさ」

キサラギ家の頂点に立つ、シュウ・キサラギ。

父でもある彼は、実子といえども当たりは容赦がない。

「せっかくキサラギ家の仕事を命じたというのに、あいつがした事といえば、俺の仕事を増やしたただけだ」

「仕方がないわ。情勢が変わったんですもの」

「ふん、優しいんだな」

真相を知らない妹に、思わず皮肉を言う。

エミリはどちらかというとカイル寄りの性格で、カイルほどではないが、末弟のリヨウに対して冷ややかだったはずだが。

「それも仕方がないでしょう？ あのまま行ったらあの子、火星で殺されてたのよ？」

いくら仲良しでないとはいえ、実の弟に変わりはない。政治の道具にされた挙句、殺されるのはあんまり過ぎると思っているのだ。

「それともお兄様は、リヨウが殺されても良かったというの？」

「そうは言っていない」

「じゃあ……」

エミリがなおも言い募ろうとしたその時、入り口の扉がノックさ

れた。返事をするにエミリが行って出迎えた。

「やあ、ここにいたのか」

入ってきたのは、もう一人の弟、ロイである。

「お兄様が出勤する前にご挨拶をと思ってね」

エミリは涼しい顔でそう言うのと、

「それじゃお氣をつけて」

と、右手をひらひらさせながら部屋を出て行った。

「何しに来たんだ？」

首をひねって肩をすくめる。

リヨウが帰ると知って、カイルがどんな顔をするのかわざわざ見に来たとしてもいうような感じだったが。

「ふん！」

氣分が悪い。

「兄さん」

「あ？ ああ、お前か」

そう言えばいたな。と思いつつ、

「何の用だ？ もうじき出るんだが」

せわしなく鞆を取り出し、ごそごそやりだす。

このロイの性格は、一言で言うに温和、である。

優しくて人当たりはとてもいいのに、芯がしっかりしていてブレない。子供の頃からリヨウの面倒もよく見てくれたし、氣難しい父親にも氣に入られてるし、カイルの扱いにも長けている。

ロイから見ると姉に当たるエミリとは、つかず離れずの關係を保っているようだが、だからと言って、この二人も仲が悪いわけではない。ただ単に、手のかかる家族が他に三人もいるから、比較的标准値に近いエミリとはかわり合う機会が少なかつただけの事だ。

同じ理由で、母親とも無難な距離感を保っていると言える。

この、キサラギ家で唯一とも言える、超まともなロイが、朝っぱらからカイルの部屋を訪れる理由はただ一つ。

「単刀直入に言うよ？ リヨウの助命嘆願さ」

途端にカイルの顔が苦虫を噛み潰したようなものになる。

「回りくどい言い方したって、兄さんには伝わらないと思ったけど……やっぱり怒った？」

「お前な、俺をバカにしてるのか？」

「してないよ、全然！　でも、姉さんから探り入れられたんでしよう？」

「ふん！　エミリの奴、自分が困ると何でも仕方がないの一言で片付けようとする」

「同情してるんだよ、さすがにリョウが可哀想だって」

「お前らは甘いんだよ」

「そうかな？」

「そうなんだ！」

すつくと立ち上がったカイルは、

「時間だ。続きは帰ってからにしよう」

と言って、ロイを伴い部屋を出た。

不愉快そうにしている割には、続きを話す気があるあたりが、カイルの生真面目さを表していると言ってもいいだろう。

「帰りはいつになるの？」

「さあな。……あ、そう言えばレイカから何か連絡はあったか？」

「レイカ？　いや、ないよ」

「……そうか」

「兄さんさ、何度も言うけど、レイカとはあまり」

「言うな」

ぴしゃりと遮った。

レイカというのは、キサラギの分家筋、ササイ家の一人娘だ。血縁で言えば従妹にあたる。

そのレイカ、実は、人当たりの良さで敵なしロイの、苦手分野なのだ。

「ともかく、続きは帰ったら話す。いなかったら打ち切りだぞ」

ロイの前でレイカの名前を出したのは失敗だった。

彼女はリヨウとは別の意味で自由奔放な女だ。その自由さ加減は、ロイに言わせれば、温厚な彼の許容を軽く超えているらしいのだが、正直カイルにしてみれば、リヨウの方がよっぽど手に負えないし、レイカの方が可愛げというものがある。

そんなカイルの気持ちを知っている……といっても言った覚えはないのだが、察しているロイは、カイルとレイカが親密にしている事を露骨に嫌がっている。

カイルがレイカと親密にしている理由は、単に気が合うだけの問題ではなく、仕事上のつながりもあってのことなのだが、それでもロイは嫌だと言う。

まあ、嫌だと言われたところで、今更付き合いを変えるつもりもない。仕事上の付き合いはなお更、個人の好悪でするものではないのだから。

「行つてらっしゃい」

大勢の使用人たちの見送りを受けて車に乗り込んだ。見送り側の窓を開けると、すかさずロイが身を寄せてきて言った。

「ちゃんと、いるからね」

「ああ」

——リヨウの助命嘆願だと？ 俺のほうが父さんに言うより楽だからって……。

思わず舌打ちが出た。

数年前の、ある昼下がり。

午後の仕事もひと段落し、誰もがのんびりティータイムを堪能していたところへ、恐ろしく不機嫌な顔をしたカイルが帰ってきた。

「お帰りなさいませっ」

カイルの機嫌は、使用人たちの精神状態に大きく影響する。父のシユウの機嫌は……それこそ、命にも関わってくるほどだ。

「本日はお早いお帰りで」

口ひげについたクリームを慌てて拭いた執事長が、いそいそと進み出てカイルの鞆を受け取る。

「リヨウはいるか？」

「はい。ただいまティータイムを……」

執事長に最後まで言わせることなく、片手を上げてそれを制止すると、押しのけるようにして広間を横切った。

庭へ出る正面の窓とは別に、居間を突っ切った先には小さなテラスがある。そのテラスの一角で、白いガーデンベンチに身を埋めるようにして座っている、リヨウの後姿を発見した。両足をベンチの上に乗せて、ひざを抱えるような格好でティーカップをすすっている姿は、とても良家の子息には見えない。

まるで引きこもりのそれだ。

腕を組んだカイルは、思わず顔をしかめてため息を吐いた。そうして気を取り直すと、声をかけるべく近づいていった。

気の合わない弟にわざわざ声をかける理由はただ一つ。

リヨウの素行について、担当の教官から注意されたからだ。

本来ならばその手の話は、父親であるシュウに行くのが本当なのだが、生憎シュウは普通の家庭の父親とは違い、子供の教育にまで神経を遣えるほど暇ではない。父には父の、キサラギ家当主としての仕事、日々、山ほどあるのだ。

ゆえに、長男であるカイルが、父の名代として下の弟や妹の面倒を見ているワケだ。

「リヨウ」

声をかけるが、振り向きもしなければ返事もしない。

「ちっ」

少しだけイラッとしたが、今はそこにこだわっている時間もない。夕方からまた、別件で会議があるのだ。正味十分でここを出なければならぬ。

「今日、シライシ教官に会ってきた」

呼び出しを食らうのはこれで二度目だ……今月に入って、だが。

「お前が休み時間に、教室で堂々と酒を飲んでいるという事だが？」
リョウの素行の悪さは今に始まったことではない。ただ、悪いとは言っても不良の類とは違い、子供っぽいイタズラが過ぎるのだ。
例えば、教室のドアに強力な粘着テープを貼り付けて開かなくしてみたりとか、教官の引き出しに大量の爆竹を時限装置付でセットしておいたりなど。後日、引き出しを開けた教官が、よく漫画にある、火事で焼け出された人のような爆発頭でリョウを追い回す姿は、学校中の笑いを誘ったとか誘わなかったとか……。

とにかく、彼のイタズラとはそんな下らないものばかりなのだ。
だから最初、彼が教室で飲酒したと聞いた時は、我が耳を疑ったのだ。しかし、担当のシライシ教官は、カイル以上に真面目も真面目、クソがつくほど真面目な人物で、到底嘘をついたり、また、確信もなく保護者を呼びつけたりするような真似はしない事を考えると、リョウが教室で飲酒していたというのはほぼ事実だろうと思ひ直して、話を聞いてきたのだ。

ところが。

「……」

待てど暮らせど、返事がない。

「おい」

さすがに腹が立って、少々キツイ口調で声をかける。

「返事ぐらいしたらどうだ？ お前のせいで俺は、貴重なティータムをふいにしてまでわざわざ帰ってきたんだぞ！」

——しかもよりによって、秘書のキースが手作りのパイを差し入れに持ってきた日に限ってだ！

秘書のキースは男だが、手先がとても器用で、そんじよそこの女なんかより、よっぽど料理が上手いと評判である。そんな彼の十八番はアップルパイ。ベタだが、これが実に美味く、プロをしのぐとさえ言われるほど。

ところがそれだけの腕を持っているのに、何を惜しむ必要があるのか、彼は滅多に料理をしない。だから差し入れのパイも次にいつ

食べられるかわからないのだからして、カイルがイライラするのも道理なのだった。

「とにかくだ！ お前はまだ学生だろう？ 昼間からのん気に酒など飲む身分じゃないのはわかってるだろうな？ そもそもお前は……」

「おー兄貴、帰ってたのかー」

「普段から不真面目すぎるんだよ！」

「兄貴……？」

「いくらキサラギ家の三男だからって、何しても許されるワケじゃないんだぞ！」

「つーか、誰と喋ってんだ？」

「学生の本分……何っ！」

くるりと振り向いたカイルの目に、アイスクャンディーをくわえながら、きょとんとしているリョウが映った。

「リョ……はあ？」

ベンチの正面に回りこむと、等身大の人形が置いてあった。

「何だコレは」

ツギハギだらけの人形が、ちょこんと座っている。

「あれ？ 兄貴知らねーのかよ。今、火星政府が極秘で作ってる人形」

「火星で……？」

ふと嫌な予感がした。

まさかとは思うが……いやしかし、リョウがあの場合を知るはずがない。

「そうそう。国家機密だってよ」

その瞬間に、カイルの両目がかッと見開かれた。嫌な予感ほど、的中するものである。

「リョウ、お前その話を誰から聞いた」

「あー？ 誰だっけな」

「思い出せリョウ！」

両肩をがっしりと掴んで、前後に大きく揺さぶった。

「思い出せリヨウ。どういう事なんだ」

「あやややや……、これじゃあ思い出せねーよ」

「ふざけてる場合じゃない。いいからさっさと思い出せ！」

カイルがこれほどまでに焦るのも無理はなかった。今、月面都市の中枢機関でもほんの一部の人間にしか知らされていない情報を、あろう事かりヨウが口走ったのだから。

リトル・ダミー計画と呼ばれるそれは、生きた人形を大量に作り、何かしら政治利用するつもりらしいと言われているが、この時点では情報が不足していて、これ以上の事はわかっていなかった。

しかし、火星内部で極秘に進められている事から、万が一それが、月面都市に悪影響を及ぼすものだとしたら困るという事で、早急な調査を必要としているのだ。

「リヨウ」

ベンチに座っている人形は、勿論、ただの人形でしかなかった。人の形を模したものを使用人に作らせたのだろう。これはこれでよく出来てはいるが、話に聞くリトル・ダミーとは比べ物にならない、本当にただの等身大のお人形である。その人形にリヨウの服を着せているのだ。

「悪趣味な事をするんじゃない！」

思わず拳骨でゴチンと頭を叩くと、

「痛え！」

大仰な叫び声を上げて、リヨウが飛び退いた。

「もう絶対思い出さねーかな！ ……あ、いや、思い出せねーの間違いだ、うん」

頭頂部をさすりながら、口元を歪める。

「とにかく忘れた！ あー忘れた忘れた！」

じゃあな！ とだけ言い残して、カイルが止める間もなくどこぞへ消えてしまった。

結局あの日以来、リヨウが口を割る事はなかった。

「リヨウか」

カイルの本心も、ロイやエミリとそんなに変わらない。いくら気が合わないとは言っても実の弟だ。政治利用までは許せても、殺されるのまでは許せるはずがなかった。

父親のシュウだけは、半ば覚悟の上だったようだが。

「ふん」

意味もなくリアウインドーを小突いた。コン、と間拔けな音がして、呼ばれたと勘違いした運転手がミラー越しにカイルを見ていた。「……なんでもない」

甘いのは俺も同じだ。そう思うと気が滅入った。

いずれキサラギ家の当主としてやっていくとなれば、シュウのように、いかなる場合も『冷徹』でなければならぬ。それなのに、火星で今にも処刑されると知って、土壇場でリヨウの命乞いをしたのは、他ならぬカイルだったのだ。

そして。

「今度もまた、俺にアイツの尻拭いをしろと」

父に会えば……さすがに殺されはしないだろうけど、それでも何らかの罰を受けさせられるのは必至。だから、エミリたちの言う助命嘆願とは、言葉通り命を助けて欲しいというものではなくて、リヨウへの厳罰をどうにか赦して欲しいという事なのだ。

ぼんやりと窓の外の景色を眺めていた。

カラフルな外套に身を包んだ人々が、寒さに鼻を赤く染めながら買い物をしている姿が印象的だ。

月面都市にも、お祝いの日はある。

冬の祭典に向けて準備を進める人々の、活気溢れる姿は、いずれも楽しげなものばかりだった。

資源によって潤う国家。

豊かな暮らしを約束された国民。

明るい未来を目指す社会。

カイルの目に映る今の月は、華やかで賑やかで、そして眩しかった。

窓の外、次から次へと流れる景色が、次第にカイルの眠気を誘う。「着いたら起こしてくれ」

事務的に告げると、腕組みをして目を閉じた。

エミリの場合

エミリがリヨウの帰国を知ったのは、夕べ遅くのことだった。

長兄のカイルが珍しく早く帰ってきたかと思いきや、従妹のレイカを交えて父親のシユウの書斎にこもり、何やら遅くまで話し込んでいた。

エミリは、そんな彼らに飲み物を持っていくように母に言われ、何でそんな使用人みたいな事を私がやらなければならないのかと、小一時間ほど揉めた末、騒ぎを聞きつけた執事長が、見かねて、わたくしがお持ちいたします。と言ったのを、いいえ、それでは腹の虫が収まりませんわ！と吐き捨ててトレイをひったくった際、うっかりトレイの上の飲み物を床に全てぶちまけるといふ一幕もあつたりした後、だったら四の五の言わねえでさっさと持っていきやがれよ！と、マジ切れ五秒前の母親から逃げるようにして、父親の書斎まで運んだ時、小耳に挟んだのである。

エミリの部屋は、カイルの部屋の隣だ。窓から眺める景色はカイルが見るのと大差ないが、室内に大きな違いがあった。

殺風景なカイルの部屋とは対照的に、こちらの部屋は、クリームを基調とした花柄の壁に、金細工の小物やシャンデリアといった、とにかく豪華な内装で固められているのだ。

エミリ本人はひた隠しにしているが、実は夢見る乙女の血が混じっているのだから、仕方がない。

そんな彼女の部屋は、使用人たちの間で鬼門扱いされている。その理由はこうだ。

エミリの部屋の中には、むせ返るような薔薇の香水がまかれている。知らない人間が不用意に立ち入ると、まず最初に激しく咳き込んで盛大にえづき、次いで目がやられ、催涙弾でも食らったのかと錯覚するほど、大量に散布されているのだ。

過去にはある使用人が、アレは酷い、ちょっとしたテロですよ！

と、涙ながらにカイルに訴えた例もあるほど。とにかくまるで平気なのは、部屋の主たるエミリだけなのだ。

今日もご機嫌にまき散らかされた薔薇の匂いが、部屋中を満たしている。この殺人的な香りに浸りながら、何気なく窓の外に目をやると、カイルの部屋からも見えていた、燃えるような赤い木が、風に吹かれて枝葉を優雅に揺すっていた。不思議なことに、これほど有名で貴重なはずの赤い木だが、正式な名前を聞いた事がなかった。幼い頃から赤い木としか呼ばれないので、エミリもそう呼んでいるに過ぎないのだ。

その赤い木が、風に吹かれてそよそよとそよいでいる。

「つまらないわ……」

子供の頃から、これでないとお眠れないほどお気に入り、大きな天蓋付ベッドに横たわり、はしたなくも肘などついてみる。

本当は、つまらないなどと言っている場合でもないのだ。

——リヨウが帰ってくる。

いるときは、ただ生意気でウザいだけの弟だったが、それでも火星へ行かされると知った時は、かなり動揺した。

それが彼女の本音だったのだ。

ところがエミリは元来、素直さに欠ける性格だ。別れのときですら、いなくなつて清清するわ、とか何とか言いながら、カイルと一緒にになって、つっけんどんに見送ったのだ。

後悔するくらいなら、もっと素直になればいいのに、それが出来るなら苦労しないと、心の中で自嘲するのが関の山だった。

「お嬢様、お客様でございます」

起きたばかりだというのに、ついうとうとしそうになったところへ、部屋の外から、聞きなれた声がした。出て行くと、慇懃な態度で待つ執事長がいた。

最近新調した、別名ヅラとも呼ばれる、不自然なまでにフツサフサしている頭髮が、目にも眩しくさん然と輝いている。だが、顔はどこか青白く見え、頬もこけているような気がする。

「ジュリアン様がお見えです」

その名前に、思わず脱力しそうになるが、それ以上に執事長のげっ所りした顔は、きつと夕べの騒ぎのせいだわ。と思いつつ、とりあえず澄ました顔で部屋を出た。

ジュリアンとは、エミリの婚約者である。

キサラギ家の兄弟は、三十五歳の長男カイルを筆頭に、一人も結婚していない。順番から言えばカイルが先だが、彼は今、仕事で忙し過ぎてお相手選びどころではないのだ。

両親は、自分たちが十代という早い年齢で政略結婚したせいから、子供たちをせっつかない。この手の名門家にしては、非常に珍しいタイプと言えよう。そのせいもあってか、みんな結婚に関してはかなりのんびりしたもので、家の中で年齢を気にしてヤキモキしているのは、この執事長ぐらいのものである。

気にしなければいつまで経っても誰も片付きそうもない事に、強い危機感を抱いた執事長が、己の命も顧みず、なけなしの頭髪を失ってまで、あの気難しい父親を説き伏せて、エミリの結婚相手にとジュリアンを推してきたのである。

それはもう……ゴリ押しならぬ、ゴリ推しだった。ゴリゴリと……。

とまあ、そんな経緯もあって、エミリとしても無下に断るわけにも行かず、ジュリアンとお付き合いをしているのであった。

「ごきげんよう、ジュリアン」

応接間に入ると、まず最初に啞然とした。

エミリが来るまでの間、よほど暇だったのだろうか、ジュリアンが庭に面する窓の前で華々しいポーキングの練習をしていた。えびぞり状態で目が合い、

「やあ、愛しのエリザベス！」

と返され、笑うに笑えず困ってしまう。

ジュリアンの性格は、一言でいえばとても優しい。婚約者であるエミリの事を誰よりも愛してくれているし、一緒にいても、とにかく

くエミリに対する気遣いを忘れない、本物の紳士である。ついでに言えば、見た目もそう悪くはない。絶世の美男子とまではいかないが、とんでもない不細工でもないのだ。

「エリザベ……うごおあ！」

どすん、と音がして、目の前からジュリアンの姿が消えた。

無理な体勢からうまく戻れず、派手にひっくり返ったかと思うと、大理石のテーブルに頭をぶつけて目を白黒させている。

「ジュリアン様！」

執事長が慌てて駆け寄り、エミリも寄り添った。

「いたたた……」

「大丈夫ですか？」

「やあエリザベス、僕は大丈夫さ。なんたって不死身だからね！」

「そ、そう？　で、でも顔色が青いわよ」

「うん……そうだね、そうかもしれない。いや、きっとそうなんだ！　だって僕は、その一生を、太陽だけに向けて生きていけるワケじゃないからね」

「……」

何だか微妙に会話が噛み合わない上に、何を言っているのかさっぱりわからない。

しかも。

「ねえエリザベス」

どうして彼は、エミリの事をエリザベスと呼ぶのだろう。いわゆる愛称と言う事なら、他の人たちはみんなエミーと呼んでいる。

エミリの本名がエミリだと言う事は最初に告げだし、間違ってもエリザベスではないと何度も言ってるのに、どうやら彼には伝わらないようだった。

ある時、ジュリアンにその理由を聞いてみた。いくら『隠れ乙女』の血が流れているとは言っても、意味もわからず勝手に呼び名を変えられるのは、どうしても納得がかなかったのだ。

今にして思えば聞かなければ良かったと思うのだが、後悔は先に

立たないと相場は決まっている。

とにかく、自分はエリザベスではないとはっきり訴えたかったエミリは、勇気を出してジュリアンに直接聞いてみた。

すると、大袈裟なまでに大きいワイングラスをぐわんぐわん揺すりながら、嫌みなほど長い足を組んでばっちりキメポーズを取った彼が、声高らかに言い放った。

「何故って？ それはね、僕がジュリアンだからさ！」

……あの時、部屋中に流れた不思議な空気を、エミリは今でも忘れられない。

啞然とするエミリが、どうしようもなくなって助けを求めた執事長の、その顔を見てまたしても絶句したのだ。彼は、ジュリアンの言う事が至極当然といわんばかりに満面の笑みをたたえ、有無を言わせぬ雰囲気身をまとして、首を縦に振っていた。

その姿はまるで『ご満悦』である。

それ以来、エミリは、ジュリアンにエリザベスと呼ばれても、一切の訂正をしなくなった。

「リヨウが帰ってくるって、本当かい？」

たった今、不吉な音を立ててへし折れた腰も気にせず、勢いよく立ち上がったジュリアンの口から、意外な言葉が出てきた。

「あ……え、ええ」

一体どこで聞きつけたのだろうか？ エミリでさえ、リヨウが帰ってくることを知ったのは、夕べだというのに。

「今朝パパから聞いたんだよ。カイル兄さんが頑張ったおかげで、どうにか宇宙航空局の許可も下りたって」

それを聞いて、ああ、と納得した。

ジュリアンの父は、情報統制を行う省庁に勤めている。しかも幹部ともなれば、その程度の情報を知っていても、何もおかしいことはない。

「そうね」

長兄のカイルは、結局エミリと同じだ。

どんなに冷たく当たったところで、最後の最後でリヨウの事を見捨てられない。本人は多分、物凄く不本意だろうから、そんな素振りは絶対に見せたがらないけど、兄妹だからわかってしまう。

やっぱリカイルも、非道にはなりきれないのだと。

「色々決まっていた事を覆すのだから、相当の苦労はしたでしょうね」

「そうだね。この世にいる限り、紫外線が避けられないのと同じだね」

「……」

どこから紫外線が出てきたのかわからないが、とりあえず脳内を高速回転させて考えるに、紫外線を一切浴びないで生きるのは難しいから、カイルがリヨウのために裏で動いたのも、それと同じぐらい大変だったろうね、と言いたかったのだろう……多分。

「まあそう……そうね！ ええ、そうだったと思うわ、ええ！」

探り探りだったが、何となくわかった気になったのが嬉しい。

「リヨウが帰ったら、一度食事でも一緒にいかがかしら？」

「いいね！ チャンドラに大臣たちも呼んで盛大にやろう！」

「いえ、そこまでは結構です……」

「そう？ でも確かに、大臣クラスはここ最近忙しいからね。それじゃあ、秘書官たちに来てもらおうか！」

「いえ、そうじゃなくて……」

大臣でも秘書官でも、とにかく誰でも呼んで欲しくない。それに、大臣たちが忙しいのはここ最近だけではない。彼らは基本、常に忙しいのだ。こんな個人レベルの食事に呼んでいいワケがない。

内心で深いため息を吐いていると、ジュリアンは急に何かを思いついたようで、いきなり立ち上がると、

「エリザベス、思い立ったが吉日だよ！ 早速手配するね！」

と言いながら、エミリが何かを言う前にスタコラサッサと出て行ってしまった。

「……え」

手配ってナニ？ などと考えていると、脇で涼しい顔をした執事長がぼつりと言った。

「坊ちゃんのご帰国は、まだしばらく先のご予定だったかと思えますが」

「そうね。それが何か？」

「いえ、ただ……」

「何よ？ はっきり言ってちょうだい」

「はい、では。……あのご様子では、ジュリアン様、今日明日にでも会場を手配されるのではないかと」

「……」

「招待者数がどのくらいに達するのかわかりませんが、お呼びする方々も中央レベルのようですし、お止めするなら、今のうちかと思えます」

その瞬間、エミリが猛烈ダッシュで広間を飛び出して行ったのは言うまでもない。

ロイの場合

廊下の奥が騒がしい。

「誰か来てるの？」

カイルを見送り、一度は自室に戻ったのだが、喉が渴いたので階下に下りたところで、広間の騒がしさに気づいた。

「ジュリアン様がお見えになっています」

見慣れた使用人の女がそう言うのと、軽く頭を下げて行ってしまった。

ジュリアンと言えば、姉のエミリの婚約者である。

金髪の彼は、長身で長髪で色白で、とても美形だとロイは思っているのだが、姉のエミリは、別に普通じゃない？ と気のない返事をする。

性格は……色々あるが、ロイから見てもエミリとのバランスは非常に良いのではないかと思っている。

何故ならば、あの刺激的な香りで家中の人間を恐怖の淵に追いやるエミリの部屋へ、躊躇いもなく入れるばかりか、部屋の主たるエミリ以外で、非武装なのに全くの無傷で出てこられる『唯一の人』だからだ。

ついでに言えば、あの破壊力満点なジュリアンの性格は、色んな意味で敵を作りにくいのではないだろうか。

その証拠に、眉一つ動かしただけで使用人たちが石像と化してしまふ父のシュウや、長兄のカイルとも、不思議なまでにつつがない関係を築いているのだ。

その、ある種の才能の塊のようなジュリアンが、家に遊びに来ていと。

「挨拶でもしておこうかな」

近い将来、義兄になる人だ。かく言うロイも、ジュリアンの事は嫌いではない。

「またね、エリザベス！」

広間の奥が一層騒がしくなったところで、突然、目の前の扉が開いたかと思うと、流れるような金髪をたなびかせ、まるで星屑を散らしたかのような輝きを放ちつつ、ジュリアンが飛び出してきた。

「おっと」

「オーウ、ロイー」

危うくぶつかりそうになったが、ギリギリのところで二人とも器用に避けた。

「こんにちは、ジュリアン」

「ごきげんようだよ、ロイ！」

話すだけで、一々キラキラしたものが舞うのは気のせいだろうか。「ちやうど良かった！ 申し訳ないけどね、ロイ、頼まれてくれな
いかい？」

どこか慌てた様子で話すのを見て、余計な事を今は聞かないほうが良いと思った。だからすぐに、

「僕にできる事なら、何なりと」と、先を促した。

「良かった、有り難う。実は今日のティータイムなんだけど、ここにいて欲しいのさ。理由はね、僕のエリザベスに、一人わびしくカップをすすらせたくないからなんだよ」

つまり、エミリと一緒にティータイムをして欲しいと言っているのだ。

「了解。今日はどこにも行かず、姉さんと一緒にティータイムを過ごすことにするよ」

「良かった！ エリザベスに寂しい思いはさせたくないからね！」
それじゃ！ と言い置いて、再び走り出した。

広間の扉をぶち壊す勢いで開け放ち、獲物を追う目をしたエミリが姿を現したのは、そのすぐ後の事だった。

「やあ、姉さ……」

表現にして、ばびゅん！ という単語がふさわしいと思うほど、

凄まじい速さで目の前を通り過ぎていくエミリの後姿を、呆氣に取られて見送った。

「まあ、こんな日もあるよね」

その後、結局エミリが戻ってこなかったので、ロイは一人でティータイムを過ごしていた。執事長が手ずから焼いたクッキーを頬張りながら、のんびりしていると、赤い木の影からかすかな気配を感じ取った。

「んー、やっぱり一人は寂しいね」

誰にともなく呟くと、控えていた使用人たちを振り返った。

「今日はもういいよ。みんな、下がって」

静かな庭先だった。はらはらと舞い落ちる赤い木の葉を踏みしめながら、ゆっくりと歩いていく。

赤い木は枯れる事がない。紅葉も落葉もなく、一年中、赤く燃えている。葉の寿命がくれば、それぞれに勝手に落ちるが、すぐに新しい葉が生えるので、枯れ木にはならないのだ。

その、赤い木が落とした古い葉を踏むと、パリパリと小気味よい音がする。

ロイは、ゆっくり歩きながら、リヨウが帰った時の事を考えていた。

リヨウが無事に帰ってくる事を、内心では家族全員が喜んでいるはずなのに、表立って浮かれられないところが、ロイには寂しかった。

様々な、複雑な事情が絡み合って、結果としてこのタイミングでリヨウが帰ってくる事になったのだが、しかしそれは、父にしてみれば不首尾以外の何ものでもないのだろう。

父親のシュウはとても怖い人だ。仕事のためなら、息子を差し出すくらいワケもない人なのだ。だから、帰ってきたところで、何のお咎めもないとは到底考えられないと、誰もがリヨウの身を案じている。

ロイは、カイルと違って父の仕事についてさほど詳しくはない。

だから、リヨウがどういう経緯で火星へ行く事になり、どういう理由で予定外の帰国となったのか、実のところさっぱりわからないのだ。

父親には怖くて聞けなくても、カイルならあるいは、と思ったりもしたが、それも彼のご機嫌次第で返答が変わる事を思うと、結局聞くのも躊躇ためらわれた。

そうしてずるずる先延ばしにしているうちに、リヨウは火星へ旅立ってしまった、後悔している間に帰ってくる事になったのだ。

「えーっと、どちら様？」

赤い木のそばまでやってきた。今も感じる気配の主に向けて、声をかけてみる。

すると。

いきなり声をかけられたのに驚いたのか、気配の主が背を向けて走り去ろうとした。

「あ、待って！」

咄嗟に腕を掴んだ。

「っ！」

「あっ」

仰天したのはお互い様で、弾みとはいえ腕を掴んでしまったロイも、そして、掴まれた相手も、どちらも驚いてその場で固まってしまったのだ。

細い腕だった。

腕を掴んだまま、一つ息を吸って落ち着いたロイが、相手が誰かを確かめようと身を乗り出す。

「君は……」

一見して、相手に見覚えはなかった。

「どこから来た子？ 迷子なの？」

そう聞いてからはっとした。

明らかにサイズの合わない服を着ている。薄汚れたフードを目深に被っているせいで、表情は読めない。靴はボロボロで穴だらけ。

ズボンも擦り切れて、サイズが合わないために裾を引きずるようにして穿いている。

とにかく、全体的に汚い印象だった。

「メイプルの子だね？」

月面都市は、火星以上に貧富の差が激しい国だ。それはつまり、階級制度を設けられるほど、段階的に貧富の差がある火星とは違って、月面都市の場合は、金持ちか貧乏かの二択しかない。いわゆる中間層がないのだ。

ロイの言ったメイプルとは、首都チャンドラの西に位置する貧しい地区の事である。

そのメイプルの子と言い切った理由は、貧しい身なりから想像しての事だったが……。

「ああ、やっぱり」

しばらく返事を待っていると、まるで観念したかのように、ゆっくりと小さくうなずくのを見て、息を吐いた。

「お腹が空いてるんだね？　クッキーで良ければ食べるかい？」

その瞬間、ちらとだけこちらを見上げる気配がした。どうやらフードの奥の瞳が、ロイの様子を伺っているようだった。

「大丈夫だよ、今は僕たち以外に誰もいないからね。安心して食べ」

ロイは掴んだ腕をそのまま引くと、ついさっきまで自分が座っていた椅子の隣まで案内する。

「食べる時は、フードを取るんだよ」

そう言いながら、埃だらけのフードに手をかけた、その瞬間。

「ひっ！」

短い悲鳴が聞こえたかと思うと、次の瞬間には、バシン！　と勢い良く手を叩かれた。

「あー！」

驚いたロイも、手を引っ込めて呆然としてしまう。

どうやら相手は、怯えているようだった。フードを取られる時、

ロイに叩かれるとでも思ったのだろうか。それとも、触れられる事自体が嫌だったのか。

とにかく、ロイの手を払いのけたものの、腹を立ててはいないだろうかと、ビクビクしているように見えた。

「うう……、あう……」

「ごめん……。あの、怖がらないで。何もしないよ？」

ぶたれるとでも思っているのだろうか。縮こまって震えている姿を見ていると、何とも言えない感情がこみ上げてくる。

ひどく惨めで、哀れな姿だった。

「ほら、こっちへおいで。大丈夫、本当に何もしないから」

「う……」

「約束するよ、ぶたないからね」

「……」

「大丈夫、大丈夫」

「……」

「信じて。本当だから」

「……」

「あの……、えっと……」

困った。

どんなに優しく話しかけても、うんともすんとも言わない。それどころか、さりげなく近寄ってみても、ちゃんと察知されて、倍の距離、逃げられる。

「弱ったな」

体格からして子供だろうとは思うのだが、男なのか女なのかまでは、判別がつかない。

「じゃあ、家まで送ろうか？」

怖がられてばかりでどうしたらいいのかわからないし、これ以上無理に引き止めるのも何かと問題だろうと考えたロイは、せめてメイプルの自宅まで送り届けてあげようと思ったのだが。

「あっ！」

急に立ち上がったその子は、あっという間に駆けていき、庭の茂みの奥へ姿を消してしまった。

「もっとよく探して」

どこか穴でも開いているのかと思い、消えたと思われる場所を、使用人たちと丹念に調べた。

しかし。

「ロイ様、これ以上はもう」

朝には元気にフツサフサしていた髪も、夕方になり、徐々にくたびれ始めている執事長が、申し訳なさそうな顔をしながら近寄ってきた。

「うーん、確かにないよねえ」

「はい」

こういう場合は人海戦術だ！と意気込んで、使用人総出で当たったが、結果は惨敗。人はおろか、蟻の這い出る隙もない。

「どこに消えちゃったんだろう」

出て行ったからには、当然、入ってきた場所もあるはずなのだが、それらしき痕跡は見当たらなかった。

「とりあえず、今後は警備をさらに強化する事にいたします」

本来の仕事がまだ片付いていない使用人たちを早く戻そうと、執事長が切り上げを願い出た事で搜索は終了した。

ところが、夜になって再び、あの少年とも少女ともつかぬ人物が、ロイの前に姿を現したのである。

「あー、疲れたわ」

夕食の時間になって、姉のエミリが帰宅した。

昼間、婚約者のジュリアンを追って出かけていってから、ずいぶん振り回されたらしいエミリの顔は、ここ数時間ですっかりやつれていた。

「大変だったね」

「ええもう。そりゃあもう大変だったわよ」

そこで一度言葉を切ると、くたびれ果てた声から一転して、

「いいえ！ 大変だった、なんてもんじゃないわね。えー……っと、凄まじく大変！ そう、凄まじい勢いで大変だったわ！」

力強い主張である。

どうしても自分が大変だった事を強調したかったらしく、身を乗り出してまで訴えてきた。

「もう聞いてよ！ ジュリアンね、チャンドラの大聖堂借り切って、リョウの帰還祭をやるんだって張り切ってるのよ」

「帰還祭？」

「そう！」

ソファにふんぞり返って、執事長の持ってきたグラスの水を一気に飲み干している。

「あー喉渴いたわ。あの人、あんな見た目なのに、けっこう足が速いのよね」

「そんなに走り回ったの？」

何をしていても華やかなジュリアンに、普段はクールなお嬢様を演じているエミリがいい様に振り回されている姿を想像すると、くつくつと笑いがこみ上げてくるが、エミリの前で笑いでもしたら、それこそ大変な目に遭わされるのはこちらの方だ。

エミリのプライドは高いのである。

「それで、帰還祭だっけ？ それって、何するの？」

「え？」

途端にエミリの鼻息が穏やかになった。

「何って……」

「リョウが帰るまでまだ時間あるよね？ 何かイベントとかあるの？」

「え、イベ……」

ロイの問いかけは、別段おかしいものではないはずだったが、どういうわけか、エミリが口ごもる。

「イベント……？」

額に手を当てて考え込んでしまった。それから何事かをブツブ

ツ眩きながら、足取りもおぼつかない様子で広間を出て行く。

その後姿を見送りながら、

「えー……？ 変な事言ったかな？」

と、首をかしげた。

「まあ、いいか」

寝酒のグラスを傾けて、何気なく庭に目をやると、シンボルの赤い木がライトアップされていた。

今日だけ特別なのではなく、いつも照らされているのだが、今夜はいつにもまして不思議な雰囲気漂っている。

冬の祭典が近いので、近々、使用人たちがあの赤い木に飾りつけをする。そうすると、近所の住民たちが集まってきて、連日賑やかになるのだ。

「来週だっけ？ 庭を開放するの」

グラスを下げに来た使用人に聞くと、

「はい。祭典の一週間前ですから」

「そうか、一週間前か……ん？」

ふと、手を止めた。

赤い木の影に、うごめく者の気配を感じ取った。

「もしかしたら」

昼下がりの、あの子供を思い出した。

メイプル地区の貧しい子。

「出てください」

あまり大きな声を出すと、使用人たちに聞こえてしまう。ロイはまず、もう一度あの子と話をしたと思っていた。そのためには、使用人や執事長に知られる前の方が良いと考えたのだ。

「おーい、居るんだろう？」

何度か呼びかけると、赤い木の影から、ひよっこりと姿を現したのは、やはり昼間の子だった。

「やっぱりね」

進入経路がわからないまま、二度もこうして入られているのだが、

だからと言って気味が悪いとか怖いとか、あるいは不法侵入に対して腹を立てるといった感情は、一切なかった。

むしろ、どこことなく微笑ましい感情さえ沸いてくる。

「こんばんは」

一応、挨拶を試してみる。返事は……期待半分といったところだ。

「……」

案の定、うんともすんとも言わない。

「君、どこから入ってきたの？　うちはけっこう、警備が厳重なんだけどな」

「……」

「君以外の誰も、正面じゃない場所からこの家には入れないのに」

「……」

何だか一人で喋っているのも変な気分だ。声が出なければ、せめて首を縦や横に振るとかの反応があればまだしも、それすらもないのはさすがにやりにくい。

なので、思い切って聞いてみた。

「もしかして、喋れないの？」

失礼な事を聞いているな、とは思ったが、ただじつと黙って立っていられても、困るのはロイばかりだ。

すると。

「……違う」

蚊の鳴くような声がして、ようやく返事らしい返事が聞けた事に、素直に安堵する。

それにしても、今が夜で、使用人たちも奥へ引っ込んでいて辺りが静まり返っているから、ロイの耳にも届いたのであって、この状況でなければ聞き逃していたに違いない。

それくらい、小さな声だった。

夜も深まり、赤い木を中心としたキサラギ家の庭には、涼しさと寒さのちょうど間の風が吹いていた。

冬なら冬らしく、凍えるような寒さが当たり前だと言いたいところ

ろだが、月面都市は人工気象が曖昧で、季節感に乏しい。

そんな中、フードを深々と被っている姿というのは、なんとも目立つ。もっとも、環境など関係なく、こんな格好でふらふらしていたら、目立つのは当然なのだが。

「よし、口が利けるのなら充分だ。なら自己紹介でもしようか。僕はロイ。ロイ・キサラギ。キサラギ家の次男だよ」

そう言って手を差し出すと、

「……リア」

小さな呟きが聞こえた。それと同時に、フードを取る。

「やあ」

顔が見えた瞬間、わずかに両目を見開いたが、すぐに笑顔を向ける。

「君、女の子だったんだね。可愛いじゃないか」

すすけた顔に、特徴のある紫がかったボサボサの黒い髪の毛。ロクに手入れもしていないのは一目瞭然で、着ている物も、一言で言えば粗末である。そして何よりロイを驚かせたのは……。

「ご飯、食べてないの？」

伸びきった襟からのぞく鎖骨が痛々しいほど浮き上がって見えている。その痩せぎすの身体は、さすがのロイも引くほどだ。

「……」

リアはうつむいたまま、何も答えようとはしない。

ロイは考えた。

この少女をどうしようか？ このまま使用人たちに見つかれば、大騒ぎされるに違いない。もうすぐカイルも帰ってくるし、父親のシユウに報告が行けば、それこそ何をされるかわかりきっている。不法侵入の現行犯で憲兵に突き出され、そうなればこの子の命は、ほぼ消えると言ってもいいだろう。何せこの子はメイプルの子だ。仮に、運良く命が助かったとしても、その後の人生は破滅を辿る。人買いに売られて、空になるまで中身を取られるか、さもなくば枯れるまで尊厳を奪われるか。

「……？」

急に黙り込んでしまったロイを、リアが不思議そうに見上げている。

——見放せて？

正直なところ、これまでのロイは、この手の暗い問題に直面したためしなかった。

一步裏へ入れば、信じ難い光景が山ほど見られる事は、話には知っていた。

だけど、あくまで『話には』程度だ。そんな事が現実として自身の人生と交わる日が来るなどとは、これまでに一度たりとて考えた事などなかったのだ。

しかし、その事でロイを責めるのは少々酷かもしれない。何しろこんなにも暗い現実があるというのに、ロイの生きている世界は、あまりにもその陰湿さとはかけ離れていて、きらびやかだからだ。

縁遠くて、実感がない。

噂が事実ならば、今日の前にいるリアの人生は、この瞬間、ロイが握っているといっても過言ではないのに。

——どうする？

本当は追いついてしまるのが一番いいのかもしれない。今なら使用人にも気づかれていないから、ロイさえ黙っていれば、リアが捕まる事はないだろう。

だがこの時のロイには、リアをただメイプルに返せばいいという考えは思い浮かばなかった。

リアは、黄金色の美しい瞳をしていた。

粉を吹いたように真っ白な肌も、今は乱れているが、手入れさえすれば流れるような輝きを見せるであろう黒髪も、少しぼってりした赤い唇も、磨けば確実に光るものを持っている。

——いやいや待て待て。僕は別に、こんな小さな女の子をどうしようとか……いやいやいやないない！

「……？」

「いやいや」

「……？」

「あの……」

決めた。そう心の中で言うと、

「とりあえず、ご両親のところに帰ろう」

このまま返すのが一番という、当たり前前の結論にたどり着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473z/>

悩めるキサラギ家の人々

2011年12月9日19時10分発行